

J.LEAGUE NEWS



編集・発行
社団法人 日本プロサッカーリーグ
ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

スポーツで、もっと、幸せな国へ。 Jリーグ百年構想

Vol. **154**
28.Nov.2008



大分が清水に快勝し、初優勝を飾る

MVP賞に高松(大分)。ニューヒーロー賞は金崎(大分)

2008 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝は11月1日、国立競技場で行われ、大分トリニータが清水エスパルスに2-0と破り初優勝を飾った。1993年のJリーグ発足後、九州のチームにとっては初のビッグタイトル。優勝の賞金1億円、Jリーグカップ(チェアマン杯)、ヤマザキナビスコカップ(スポンサー杯)、メダルが授与され、準優勝の清水には賞金5000万円、Jリーグ楯、メダルが授けられた。MVP賞は大分のFW、高松大樹が受賞し、賞金100万円、クリスタルオーナメント、ヤマザキナビスコ製品1年分を獲得。ニューヒーロー賞には大分のMF、金崎夢生が選ばれ、賞金50万円、クリスタルオーナメント、ヤマザキナビスコ製品1年分を贈呈された。

J.LEAGUE OFFICIAL SPONSORS



右サイドからのセンタリングを、大分の高松がヘディングシュートで先制ゴール。キャプテンが大舞台で重責を果たした



©J.LEAGUE PHOTOS

Jリーグ ヤマザキナビスコカップ

堅守の大分、クラブ創設14年での快挙

長く、激しい戦いを勝ち抜き、2008 Jリーグヤマザキナビスコカップのタイトルへと一歩と迫った大分トリニータ、清水エスパルスの対決。予想通りの白熱した攻防を制したのは、クラブ創設から14年の大分だった。日本サッカー界のレベルアップにも大きな刺激を与える快挙。クラブはまた一段、ステップアップし、国際舞台への扉も開いた。

球際の激しい攻防

クラブ史上初めて、Jリーグヤマザキナビスコカップの決勝トーナメント進出を果たした大分トリニータは、その勢いに乗って準々決勝でFC東京、準決勝で名古屋グランパスに競り勝ち、決勝へコマを進めた。一方、清水エスパルスは、準々決勝で昨季のJ1リーグ戦と天皇杯全日本サッカー選手権大会の2冠チーム、鹿島アントラーズを、準決勝ではヤマザキナビスコカップ連覇を狙ったガンバ大阪を破って堂々の決勝進出。1996年以来となる、12年ぶり2度目の優勝を目指した。

試合は立ち上がりから、緊迫感にあふれる展開となった。この1試合でタイトル獲得の明暗が分かれる一戦だけに、試合を有利に進めるための先制点をめぐって、球際の激しい攻防が演じられた。前半、大分のMFホルベルトのシュートがゴールポストに阻まれ、清水のDF高木和道のシュートがわずかにゴール左へそれるというシーンがスタンドを沸かしたが、両チームとも無得点で折

返す。

均衡が破れたのは後半の半ば、68分のことだった。大分はそれまでも何度かチャンスをつくっていた右サイドから攻め、MFエジミウソンの縦パスを受けたMF金崎夢生がゴール前にセンタリングを上げると、長身のFW高松大樹がヘディングで決めた。

さらに、1点差を保ったまま迎えた試合終了直前の89分、再び金崎が右サイドから中央で待ち構えるFWウェズレイにパス。準決勝の名古屋戦で大分の全得点を決めた36歳のベテランストライカーは、勝利をほぼ決定づける追加点を落ち着いてけり込んだ。

清水も先制された後、DF市川大祐、FW矢島卓郎などを投入して反撃した。だが、ゴール前を厚く固める大分の堅守を崩すことはできず、無得点に終わった。

試合終了を告げる吉田寿光主審のホイッスルが鳴ると、ベンチの選手やスタッフも加わり、ピッチ上の選手たちと歓喜の抱擁。ホーム側のスタンドをチームカラーのブルーに染めたファン・サポーターからも盛大な拍手と歓声が降り注いだ。

国際舞台への挑戦

大分はJリーグの発足後、1994年のクラブ創設。大分県1部リーグをスタートに、九州リーグ、JFL（日本フットボールリーグ）と階段を上り、99年の1・2部制導入とともにJリーグへ入会。2002シーズンにJ2リーグ戦優勝を飾り、J1へ昇格した。

その間には、経営的に厳しい時期を経験したこともあったが、地道に地域密着を推進し、その成果はJ1における1試合平均入場者数が2万人を超えるという数字にも表れている（07シーズンまで）。国立競技場の決勝にも、空路、陸路によって1万人を超えると見られるファン・サポーターが駆けつけ、チームに力を与えた。

こうした基盤の上に、2005年9月に就任したブラジル人のシャムスカ監督の繊細な指導、大胆なさい配などが実り、家族的な雰囲気でもとまったチームの力が開花。かつては「タイトルを狙えるようなチームではなかった」（シャムスカ監督）存在が、今季は鹿島アントラーズや浦和レッズなどの強豪

大分トリニータ 2 0 清水エスパルス

【得点経過】 68分 1-0 (大)高松 大樹
89分 2-0 (大)ウェズレイ
【入場者数】4万4723人
【主審】吉田 寿光
【副審】廣嶋 禎数 / 武田 進
【第4の審判員】奥谷 彰男

© J.LEAGUE PHOTOS

© J.LEAGUE PHOTOS

試合当日は秋晴れ。両チームのファン・サポーターはチームカラーでスタンドを鮮やかに彩り、決戦への雰囲気盛り上げた



© J.LEAGUE PHOTOS

試合終了直前、大分はウェズレイが清水のGK山本の足元を抜く貴重な追加点を挙げ、勝利をほぼ確実に



© J.LEAGUE PHOTOS

清水も岡崎(左)を中心として果敢に相手ゴールへ迫ったが、大分の堅守に阻まれた。右は上本



© J.LEAGUE PHOTOS

シャムスカ監督を胴上げする大分の選手たち。チームを率いて4シーズン目となるブラジル人監督の功績も大きい

シャムスカ監督(大分)

「今日、獲得したタイトルは、言葉では表せない重い深みがあると思う。われわれのホームタウンからここ(東京)までは非常に遠いが、ファン・サポーターはその距離も関係なく足を運んでくれた。彼らのその行動は、われわれがしっかりとピッチで答えが出せると信じた上での行動だったに違いない。彼らが来てくれたことによって、初めて戦う国立(競技場)も、まるでいつものホームゲームのような雰囲気だった。本当にファン・サポーターには感謝している」



© J.LEAGUE PHOTOS

長谷川 健太監督(清水)

「まず、大分の選手、監督、スタッフ、そしてファン・サポーターの皆さんに心からおめでとうと言いたい。われわれも精一杯、この試合に勝つための準備をして、国立(競技場)で戦ったわけだが、勝利を挙げることができなかった。悔しい気持ちでいっぱい。この後、(第88回)天皇杯(全日本サッカー選手権大会)があるし、まだリーグ戦が4試合、待っている。今日は多くのファン・サポーターの期待に応えられなかったが、次こそは喜びを一緒に分かち合いたいと思う」



© J.LEAGUE PHOTOS

「会場の雰囲気も素晴らしいかった」鬼武 健二Jリーグチェアマン

「九州から初めてタイトルを獲得するクラブが出たことは、とてもうれしく思う。欲を言えざりがないが、試合の中身は大分の方が結果的に良かった。清水はもっとアグレッシブな戦いをしにいくと思ったが、ゴール際の戦いは大分の方が積極的であった。会場の雰囲気も素晴らしいかった。大分と静岡からあだけのファン・サポーターが集まり、4万4723人もの方々が来場してくれたことをとてもうれしく思う。シャムスカ監督の下、選手とスタッフが丸となった結果であろう」



© J.LEAGUE PHOTOS

恒例のニューヒーロー賞は金崎(大分)

2008 Jリーグヤマザキナビスコカップの予選リーグから準決勝まで、最も活躍が顕著だった23歳以下(2008年3月20日の大会開幕時)の選手に与えられるニューヒーロー賞が、決勝前日の前夜祭で発表された。受賞したのは大分トリニータの19歳のMF、金崎夢生。将来性を感じさせる魅力的なプレーを披露し、大分の初の決勝進出に貢献した活躍が認められた。大分からの同賞受賞は初めて。

Jリーグの山下則之技術委員会委員長は選出の経緯について、「活躍の印象度において、他の候補を上回った。大会を通じて警告、退場がゼロと、フェアプレーの観点からも称賛に値した」とコメントした。

受賞した金崎は「受賞はみんなのおかげ。いろいろな方に感謝したい。ヤマザキナビスコカップではゴールを決めていないので、決勝ではぜひ決めたい。新しい歴史をつくるために、東京に来た」と述べた。



© J.LEAGUE PHOTOS

前夜祭&「ナビスコキッズバトル」

決勝の前日には恒例の前夜祭、当日の試合前には同じ国立競技場のピッチ上で「ナビスコキッズバトル」が行われた。

前夜祭では、大会を特別協賛するヤマザキナビスコ株式会社の飯島茂彰 代表取締役社長が「このヤマザキナビスコカップがこれほど隆盛になったのも、Jリーグ、日本サッカー協会、あるいはフジテレビ、関係各社、記者の皆さんのおかげだと思っています。あらためて感謝申し上げます」とあいさつ。

登壇した選手たちを代表して、両チームのキャプテンも一言。「あすは大分らしいサッカーをして、優勝を目指して頑張る」(大分トリニータの高

松大樹)、「ぼくたちは若いチームなので、それを生かして静岡にカップを持ち帰りたい」(清水エスパルスの高木和道)と、翌日の決戦へ向けて力強く抱負を述べた。

また、決勝のキックオフ前のピッチで開催されたナビスコキッズバトルは、予選リーグから準決勝までの各会場で行われた「クラブといっしょにコクリツを目指そう!!」に参加した、各チームの小学生以下のサポーターより選ばれた22名(各チーム11名ずつ)によるイベント。ドリブルゲーム、シュートゲームに挑戦した大分と清水のキッズレブンは、スタンドから大きな声援と拍手を送られた。



© J.LEAGUE PHOTOS

前夜祭で登壇した両チームの選手、監督。翌日のファイナルの前に、勝利への決意を新たに



© J.LEAGUE PHOTOS

ナビスコキッズバトルは、子供たちにとって素晴らしい思い出。ドリブル、シュートに取り組む表情も真剣そのもの



© J.LEAGUE PHOTOS

を相手に、J1の優勝を争うまでに成長した。また、金崎やGK西川周作(負傷のため決勝は欠場)、DF森重真人など、日本代表も視野に入れる若い選手も、第一線で活躍するようになった。

Jリーグ発足以後、九州のチームが獲得した初めてのビッグタイトルは、同地域のサ

ッカーの普及、レベルアップに「いい影響を及ぼすだろう」とシャムスカ監督。同時に、クラブ創立から14年で成し遂げた快挙は、Jリーグを目指すクラブの良き手本、刺激となり、「日本全体のレベルアップにつながる」(同)ことにもなるだろう。

2008 Jリーグヤマザキナビスコカップの

優勝によって、大分はアメリカ、オーストラリアという環太平洋地域のチームと競う「パンパシフィックチャンピオンシップ」、南米のコパ・スダメリカーナ優勝チームと戦う「スルガ銀行チャンピオンシップ」への出場権も獲得した。国内のタイトル、そして国際タイトルへ、大分の世界はさらに広がる。